

罪を犯したら

受難節第2主日を迎えました。今年の灰の水曜日、灰は悔い改めの象徴ですが、その日は2月22日でしたので、ちょうど10日を過ごしたことになります。受難節はイースターまでの日曜日を除く40日間と定められています。受難節の4分の1の日程を消化したわけですが、どうでしょうか。この10日間の日々は、それ以前の日常とあなたの意識の中で違っていたでしょうか。それとも教会暦は名ばかりで、この地上で生きるカレンダーに支配され、受難節に入ってもあまり変わらない日々を過ごしておられるでしょうか。わたしはいま日程を消化という、受難節の過ごし方を表現するにはふさわしくない言葉をあえて使いました。消化試合という言葉があります。もう結果は出ていて、いまさら努力してもそれをくつがえすことは出来ないけれど、規定上こなさなければならない試合の数があって、それで行われる試合をいいます。勝敗に関係ない、盛り上がらないので流す。そういう10日間であるならば、それは勿体ないと思います。もちろん2月22日を境にして、わたしたちの苦しみや悩みや悲しみ、課題が始まったということは少ないでしょう。苦しみや、悩みや、課題はつねにわたしたちの前にあります。ではむしろ、こういうことでしょうか。あまりにも苦しみや悲しみが重く、長く、暗い夜のように続くので、わたしたちはもうそれになれてしまって、負け続けるのに慣れてしまって、願うことも、叫ぶことも、祈ることも忘れてしまっているのでしょうか。コロナウィルスのもたらした非日常が、だんだん日常と化していったように、罪や死の支配する世界の日常に慣れて、それが異常だとも、わたしたちが憐れみを必要だとする思いも失われてしまい、日々を消化してゆくのが日常になってしまっているのでしょうか。こう考えることも出来ます。少なくとも2月22日以降の10日間に、わたしの日常を脅かすような特別な出

来事はなかった。だから同じように日々を過ごしている。それは感謝なことです。主なる神があなたを守られた。しかし、どうでしょうか。わたしたちの群れに目を向けてみれば、成井和子さんが召されたのは2月20日で、葬儀は受難節にはいって23日の木曜日に行われました。悲しんでいる人がおられます。また世界に目を向ければ、その翌日の24日はロシアによるウクライナ侵攻から1年を刻む日でした。世界は痛みを負ったままの状態です。戦火によって故郷や家族を喪う人がいます。難民となって各地にちらされ、ディアスポラのパレピデーモスとなった人たちがいます。日本に逃れてきている人もいます。しかし、わたし自身、そうしたことに慣れてしまい、1年前ほどに心を動かされなくなっていることを認めないわけにはゆきません。詩篇の詩人はこうした状態を上手に表現しました。「これが自分の力に頼る者の道 自分の口の言葉に満足する者の行く末、死が彼らの牧者となる」(詩篇49:14~15節)、と。わたしたちは、自分の感性や、靈性に頼ってはいならないのだろうと思わされます。罪と死の支配は、わたしたちを飼いならしており、神のみ顔を仰ぐことを得させなくしているからです。だから、この受難節の日々を世々の教会は祈りの日として用いること、また信徒訓練のために用いてきました。イースターという、キリストが死に勝利した日を祝うために、主イエスが何を、どのように担われ、戦われたかを聴き、その出来事の中に、わたしの悩み、悲しみ、苦しみ、叫びを重ねる時として用いる時です。それには御言葉が必要です。わたしは自分の心を守るために、普段は水深2~3メートルの浅瀬で生きているのだなあと、今年いろいろなことで思い当たりました。教会員の突然の死のように突然深みに足を引っ張られて沈むこともありますし、ゆるやかに深い方に、暗い方に向かっている自覚もあります。そして、底なしの深み、日本海溝やマリワナ海溝のように、もう光を通すこともない、すべてのものを飲み込む混沌のよう

な苦難もあります。その先に死があるのでしょうか。それはわたしにはもう手が出せない。最初からお手上げというか、戦うことを放棄してしまうような状況です。だから、御言葉の潜航艇が必要なのだと思います。レントカレンダーでも、日毎の糧でも、聖書日課でもよい。わたしたちは御言葉の力に守られなければ、こうした苦難の深みを覗き込むことは出来ないのです。そして出来れば、こうしてともに御言葉に聴くのが良い。信仰をおなじくする兄弟姉妹がともに御言葉によって潜ってゆく。そして、その底に、それを陰府と読んでも良いと思うのですが、絶望の底に、キリストの十字架があることを見出したい。苦難が忍耐を、忍耐が練達を、練達は希望をうむ。希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです、この御言葉にご一緒にアーメンと唱えたい。

そうです、この礼拝の場に神の霊が注がれています。ふたり、または三人が、わたしの名によって集まる時、わたしもそこにいと主イエスは約束しておられる。そして今朝、わたしたちに与えられている御言葉の潜航艇は、列王記にしるされるソロモンの祈りの一部です。これはエルサレム神殿が完成した時の奉獻礼拝のなかで、ソロモン王が神にささげた祈りの最後の部分です。受難節には祈りを学び、神へと逃れる術を見出したい。ソロモンは何を、神に祈り、願ったのでしょうか。その前に、そもそも神殿はなぜ必要だったのでしょうか。わたしたちの場合ならば教会でしょうか。天地万物を創造された神さまに地上のすみかが必要なわけではありません。そのことはソロモンもよく分かっていました。神殿の中心、これを至聖所と言いますが、そこには神の箱が置かれていました。十戒が納められた箱で、契約の箱とも呼ばれます。これをエルサレムに運び上げた父ダビデ王は神殿を建造することはありませんでした。しかし、ソロモンは財を尽くし、国を傾けるようにして神殿を建造しま

す。繰り返しますが神は人間の手で造ったすみかを必要としません。バビロンのマルドゥク神とか、伊勢神宮のアマテラスとか、神もどこかの山を住まいとしたり、川や湖を住まいとするといった伝承には事欠きません。しかし、イスラエルの神、イエス・キリストの父なる神は天にいまし、場所にではなく、ひとにつくのです。聖書を読めばわかります。人間の行いに目を注ぎ、心を留め、心を痛め、顧みられる人間とともに歴史を歩まれる神です。低きに降る神でもあります。そしてそれはまことに不思議なことですが、神が、人間をご自身に似たものとしておつくりになった。その関わり、さらに神が心をひかれた民として、アブラハムを選び、イスラエルの民との契約によって彼らの神と呼ばれることを良しとされた。わたしどもを愛してくださった。この特別な関係があつてこそ、このソロモンの祈りは祈られているのです。わたしたちにおきかえれば、洗礼によってイエス・キリストと結ばれていることによって、キリストを通して天地万物の創造主である神を、父と呼ぶことが許されている。さらに深い、一段も二段も踏み込んだ交わりの中に入れられていることを覚えたいと願います。話を神殿建造のさいのソロモンの祈りに戻します。神にすまひが必要なかったにもかかわらず、神殿を造ったのであれば、それはわたしたち人間の側にどうしてもそれが必要だったからに違いありません。そして、今朝は時間の関係で最後しか読みませんでしたが、実はこの祈りは7つの部分に分けられており、いずれも神さまに向かつての切なる願いです。最初こそ、王朝がダビデに誓われたように続きますようにという願いですが、残りはすべて罪の赦しに関わっています。まず天にいまして耳を傾けてくださいと願い、主の御声に聴き従わなかった場合の呪いの数々から、どうか立ち返らせてください。許してくださいという嘆願になっています。このようにしてみますと、神殿の機能は、天にいます主なる神に向かつて、罪を犯し、背き続けるわたしたち人間の陥る悲惨な状況か

らの救いと赦しを求める叫び、祈り、願いであることがわかります。ここにはすべてのことを神さまとの関わりで捉え、国の滅びや、土地を失うことを、神の裁きと捉える旧約聖書独自の歴史観があります。さてそこで7番目の祈りを少し丁寧に見てみたいと思います。「もし、彼らがあなたに向かって罪を犯し、一罪を犯さない者は一人もいません—あなたが怒って彼らを敵の手に渡し、遠くあるいは近くの敵地に捕虜として引いてゆかれたときに～、」とソロモンは祈ります。この状況は、実はモーセがイスラエルの民に向かって述べた遺言である申命記の最後に記されていることなのです。モーセは、約束の地に入ることなく死にますが、これからあなたたちが住まうことになる約束の地、カナンでの生活が、主の道に沿ったものであるならば祝福が、それに背くならば呪いが降りかかるだろうということを懇切丁寧に語って聞かせました。このソロモンの祈りは、彼らが神に背いた場合に降りかかる神の怒り、罪の報いとしてふりかかる状況からの救いを求める嘆きであり、祈りです。そしてこれはバビロン捕囚が視野に入っています。もちろん、ソロモンが祈った時点でそのことは起きていません。しかし、列王記をこのように今見る形に整えた者たちは、あきらかに捕囚の現実を知っており、自分たちの立ち返る場所としての神の憐れみと慈しみをきちんと指し示している。神の裁き以外により頼むべき場所はないことを確認しているのです。ソロモンは、神の民がこのようになったならば、という状況を語った後、神に次のように矢継ぎ早に願っています。耳を傾けてください、裁きを行ってください、赦し、憐れみを施し、彼らを捕らえた者たちが彼らを憐れむようにしてください、あなたの嗣業の民であるしもべの願いに御目を向けてください、耳を傾けてください、この祈りをソロモンは両膝をつき、両手を天に向かって上げて祈ったといえます。ソロモンは智慧の王とも呼ばれますが、彼が知っていたことはなんでしょうか。それはこの神殿奉獻の祈りの

ほとんどが罪の赦しを求める祈りであったように、人の弱さを知っていたことです。そしてその人の弱さとは、わたしたちが主の御心に背く者であり、赦しに生きることが出来ないことです。主は生きておられる、という表現が旧約聖書でよく見られますが、その神の現臨は、神の裁きにおいて現れる。そして感謝すべきことに、立ち返ること、赦しを願うことがゆるされているのです。神が神であることは罪の赦しにおいて表される。罪の赦しこそは人間業ではない、神業、神の修復の業であり、和解の出来事、神の主権に関わる特別なものであることを、このソロモンの祈りから知らされます。神殿は罪の赦しのために必要とされた場所でした。しかし、この神殿は何度も破壊されます。イエス様の死後、ローマへの反乱によって破壊され、イスラエルの民は散らされてゆきます。地上の建物がわたしたちの罪の赦しに必要なのではない。神殿とそこで捧げられる犠牲によって、わたしたちの罪の問題が解決されるのではないのです。このことは特に新約聖書の時代に生きるわたしたちに当てはまります。すでに罪の赦しのために、神殿でささげられる動物犠牲をわたしたちはささげません。この教会の中に動物犠牲をささげる祭壇は備わっていません。代わりにあるのはこの聖餐桌です。先週、わたしたちは聖餐式を行いました。そのなかで主イエス・キリストの、わたしたちのために割かれた肉、流された血を覚えました。わたしのために死んで下さった十字架の主の死を告げ知らせるという志を再確認しました。キリストの血と肉に与る時、キリストは親しくわたしたちのうちに臨んでおられますと聖餐式の式文にあるように、罪の赦しを願うソロモンの祈りは、キリスト・イエスが来られ、十字架の道すじを辿られたことによって全くあらたな段階に至ったのです。動物の犠牲ではなく、神の独り子の犠牲によって、わたしの背きの罪は拭われている。神は、わたしの弁護者としてキリスト・イエスを送って下さった。ここに愛があります。石で作られ、金銀

で飾られた神殿にではなく、わたし自身を神にささげられた聖霊の宮として用いてくださる。神はキリスト・イエスを、わたしの弁護者としてくださることによって、主の慈しみに生きる者たちを、深い穴、陰府に捨て置くことを許されませんでした。キリスト・イエスご自身が陰府に下り、3日間、そこに身を横たえられました。そして人の終わりである墓穴を栄光に輝く復活の場とされたのです。わたしたちは墓穴を覗き込んで絶望するのではなく、キリスト・イエスによって、天に蓄えられている朽ちることも、汚れることも、しぼむこともない復活という希望を与えられたのです。わたしたちにはソロモンの祈りに代えて、主の祈りが教えられています。そこにも日毎のパンを求める願いと共に、日毎の赦しを求める祈りが教えられています。この祈りから離れてはなりません。キリストの執り成しを希望としつつ、受難節の残りの日々を祈りの日として覚えてたく願っています。

お祈りいたします。